

若狹灣岸一部の隆起現象に就て

上 治 寅 次 郎

寛文二年の大地震は京都に震央があつたが、高野川の谷並に安曇川上流朽木谷に於ても激烈を極めた事情は日本地震資料並に本邦大地震概説等に詳かである。この大震の際には若狹三方湖附近に於ても亦烈震を感じ、これ等の諸低地を連ねる線は近畿地震構造線の研究上注意すべきであつて、曾て小川博士によつても重要視されたことがあり、最近に於ては山崎博士、多田理學士による有益な研究がある。

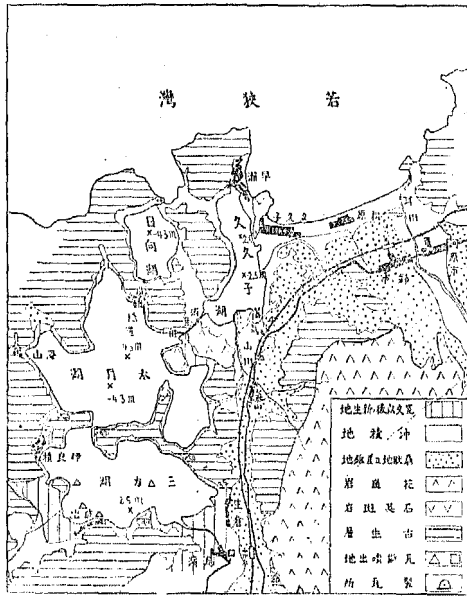
三方湖は狭き水路によつて水月湖に、水月湖は嵯峨暗渠によつて日向湖に連つて遂に若狹灣に連續する。又水月湖は浦見川によつて久々子潟湖に連る。この浦見川は寛文四年の開鑿にかゝるもので、従前に於ては水月湖の東から氣山川となつて久々子湖に流れたものである。これ

等の諸湖は地質時代(第三紀末?)に於ける土地の沈降によつて生じたもので、久々子湖も亦沈降地帯に生じた潟湖である。附近一帯は標式的斷層地貌を示し、北は久々子の聚落から南へ氣山、三方、十村の諸村を連ねる南北線を境界として、東に斷層崖西に溺没谷を有し、斷層崖下には前記の諸村に於て扇狀地、集合扇狀地が美しく發達するのである。この南北線は多田理學士が三方斷層と命名されたものであつて、これ等の地形は五萬分一西津村地形圖に明瞭である。京都附近に於ける斷層の性質から推察すれば三方斷層の生成は多分第三紀末であつたであらう。

記録によれば近き歴史時代に於て三方湖は漸次に氾濫し、萬治二年頃には湖畔の耕地を埋没

せしめる様になつたので、寛文元年八月下旬から浦見川の掘割普請が始つた。然るに翌二年五月一日大地震が突發し、湖水の出口なる氣山川の水路を失ひ、水月、三方二湖の水位は益々高

三方湖附近地質圖



くなり、湖畔の鳥濱、田名、伊良積、海山の諸村は移轉の止むなきに至つた。よつて餘震瀕々たる中にも五月廿三日より浦見の掘割は再び着手され、全四年五月に至り百八十間の水路、浦

若狹海岸一部の隆起現象に就て

見川を完成した。これによつて水位が低下し、新に干潟が生じたから開墾功勞者に之を興へ、家を建てしめて開墾させたのであつて生倉、成出の二村は即ちこれであるといふ。更に大震當時の狀況を記して『三方郡の内丹生浦より早瀬迄五、六里斗の間大海磯邊八十間百間、早瀬浦は沖へ百三十間ひあがる。水尾中山より嵯峨の坂迄は五尺八寸をゆりあぐる。中にも氣山の川口は壹丈二尺ゆりあぐると云ふ』とある、これ等の現象は如何に解釋すべきか。凡

そ三方斷層線以東は寛文地震の數年前から漸次に隆起しつゝあつたが、大地震の際俄に數尺の隆起を生じ、従つて三方湖水月湖は流出口が高まりしを以て益々水位を高めたと解することは出來ざるや否や。又斷層崖を刻む氣山川扇狀地が次第に發達したことにもよるのではないか。暫く四近一帶の形貌を觀察すればこれ等の疑ひは水解するであらう。

鐵道小濱線によつて新舞鶴から東行すると、二三の小隧道を縫ふて汽車は若狹高濱に着く。

高濱は低き新成の沖積地に存在し、後方には新らしき海岸斷崖が並んでゐる。その東方和田村は巾約一畝のトムポロ上に存在し、大島と連つてゐる。以東は海岸平野は極めて狭まけれど本郷、加斗附近には小三角洲、小平野を見、又十米前後の段丘も見える。小濱は隆起せるドロンドバレーに發達せる小港である。蕪洞門の奇勝は内外海村にあつて、石川理學士の記事及寫眞によつて推察すれば過去に於ける斷層海岸が、現今に於ては隆起しつゝあることによつて生じたものらしい。相州江の島の洞窟とその成因を一にすべき洞門が波蝕面上遙に高く存在し、波蝕臺と思はれる形が現今の海面よりも高所に存在する等は隆起を示すものでなからうか。以東の海岸は極めて屈曲多き險崖であつて、岬角に於て殊に甚しき斷崖をなす。しかるに灣頭には小平野があつてその高さ十米乃至二十米に及び若し後背地より砂礫の運搬が豊富な場合には大なる新生地を作つてゐる。彼の三方諸湖の東方にある耳川下流の扇狀地は即ちこの例である。

この扇狀地は海岸の砂丘又は砂嘴（材料は耳川の運搬物即ち扇狀地を作るものと同様のもの、及び久々子西方小丘を作る石英斑岩類）と連續して、往時の海岸に近く存在した小島（例へば郷市の西、久々子の西、水野の北等）を連結したのである。この扇狀地の西端は金山附近に於て十米乃至二十米の段丘をなして久々子湖に面する。久々子湖が完全なる潟湖とならざる時代に現今の久々子部落附近からの灣入による海蝕と、水月湖より來る氣山川の浸蝕とは扇狀地の西端を截斷したのである。この水蝕斷崖は氣山部落から北微東に走り久々子部落の東方に至つて砂丘に隠れてしまふ。この段丘を構成する材料は下部には淡褐色の粘土層があつて數戸の瓦屋に利用され、上部には大豆大の橢圓小礫よりなる三米許の礫層がある。地表の傾斜の少なき扇狀地末端に運ばれた小礫が波浪のために更に小さく圓くされたものである。渡邊理學士の報文には崖錐堆積層となつてゐるが、これは山麓の一部分に過ぎず、段丘の大部はテラスでは

ない様である。この地層の末端附近は殆んど水平層であるが十米以上隆起してゐる事實より洪積新層としたい。而して耳川はこの隆起低地の中を浸蝕して兩岸に新しき沖積地を形成しつゝ、若狭灣に入るのである。(地質圖參照地質圖作製につき村松繁樹君の盡力を感謝す)

以上は若狭海岸に小旅行を試みて觀察した處である。急ぎの旅行であつたから踏査不十分なるは遺憾であるが(一)若狭高濱附近から三方湖東方に至る若狭一部の海岸は現今に於て約二十米以内の隆起を認むる處多きこと(二)三方湖附近は斷層地形として興味深きこと(三)萬治寛文年間の三方湖氾濫は氣山東方の斷層崖を浸蝕し來る氣山川其他の扇狀地の發達と地震による崩壞とのために流出口の埋没原因によることが直接の原因であつて、三方湖盆の沈降によるものでないらしく、湖盆は寛文地震後も却つて隆起せしやを思はしめること(四)三方斷層地帯は生動性の地震構造線として重要なものなること等を確めることが出來た。但し、三方湖附近の

隆起の程度の大小につきては更に研究を要する

文 献

- (1) 大森房吉、京都及附近の大地震、震災豫防調査會報告第五十七號、明治三十九年
- (2) 日本地震資料、震災豫防調査會報告第四十六號、明治三十六年
- (3) 大森房吉、本邦大地震概説、震災豫防調査會報告第六十八號(乙)、大正二年
- (4) 小川琢治、深發地震の本性(大峯噴出帯)、地球第一卷第三號、大正十三年
- (5) 山崎直方、多田文男、琵琶湖附近の地形と其の地體構造につきて、東京帝大地震研究所彙報、第二號、一九二七年
- (6) 中村新太郎、京都大阪奈良神戸四近地質説明文、地球第八卷第一號、昭和二年
- (7) 晴南樵夫、三方湖掘割普請並大地震之事、地學雜誌第四卷第三十七號、明治二十五年(古記録の寫)
- (8) 石川成章、若狭蘇洞門の奇勝と有用礦物、地球第六卷第五號、大正十五年
- (9) 渡邊久吉、福井縣三方湖地質及湧水調査報文、地質調査所報告第六十三號、大正六年